

# 超高齢社会における宗教の老年者ケアと QOL・健康概念

平良 直

## はじめに

超高齢社会となり、少子化がさらに進み、あらゆる領域で、これまでの体制を維持していくことが困難になりつつある。次世代人口が確実に減っていく中でどのような社会を構築していくかが喫緊の課題となっている。あふれるように増え続ける超高齢者をどうケアしていくかということも忘れてはならない課題である。

筆者は宗教学の領域から、この増え続ける高齢者に対して諸宗教教団がどのようなケアを行っているのかということに関心をもってきた。特定の宗教教団への調査はまだ行えていないが、超高齢社会の実情を知るための基礎作業として医療分野における老年問題や、倫理学領域のケア論、または老年学領域の成果の中から、老年者のケアに関係する書籍等を読み込んでいるところである。その作業で気づいたことは、老年者にかかわる諸学において、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）概念や健康概念をもとにさまざまに探究がなされているが、この二つの概念の中心的な部分に、ぼんやりとではあるが、宗教的な要素、あるいはスピリチュアルな要素を含みこんでいることを示しながらも、老年研究の専門家たちは、それについてごく簡単に言及するだけで、それを主題化することは少ないということである。老年学領域の研究者は「宗教」の専門家ではないので、ある意味、それは当然だということになるのであろう。それこそ宗教研究者がそのことを探求し、老年学領域へ貢献すべき課題であるといえるだろう。超高齢化、少子化のなか新宗教教団にかぎらず、伝統宗教教団でさえも体制の維持が今後不安視されるなか、多くの高齢者にたいして、宗教、より限定していえば宗教教団はどう対応すべきかが課題となってくる。老年学領域におけるQOLに関係する宗教的な要素、スピリチュアルな領域と宗教はどのようにかかわっているか、または何が問題となっているのかを理解しておくことは重要なことである。

超高齢社会の到来、といわれて久しいなか、宗教についてはその担い手の減少と教勢の行方にばかり目が向けられがちであるが、本稿では、冒頭で記したように多くの超高齢世代のケアの問題群のなかで宗教はどのような対応を迫られているのかを考察したい。同時に老年学で重要な指標となっているQOL概念および健康概念について考察する。超高齢社会の問題を学際的に探究する老年学領域と宗教とが交差するのは、病や死、人生の苦にどのように対処するかといったことや、人生の意味、生きる意味などが問題になる領域である。老年学ではスピリチュアリティを問題にする領域であり、この領域と関係するのがQOLや健康の概念なのである。

WHOは2000年に「健康寿命」(healthy longevity)という指標を提唱した。健康寿命とは、単に生存の長さだけを求めるのではなく、「生活の質・人生の質(QOL)」をいかに長く保つことができるかを求めるものであり、疾病状態での寝たきり状態や、認知症などの期間をできるだけ短くすることが目指される指標である。この概念は、高齢になっても社会的かかわりを持ち活動できる高齢者像を想定する、ある種のサクセスフル・エイジングの考え方だといえるだろう。高齢者が元気であることは望ましいことなので、このWHOの指標は賛同を集め、日本においても浸透している。しかしな

がら、よく考えていくと、この概念には、ある種の冷たさが含まれているのではないかと筆者は感じてしまう。というのは、だれでも晩年まで病に臥すことなく元気であり続けたいと思う。そのことは結構なことではあるが、しかし、病を持ちながらも病床で過ごすことが避けられないこともある。またはそうなりたくなくても認知症を患ってしまうことは当然ある。このようにいうと、元も子もない見方だと思われるかもしれないが、「健康」な「寿命」が途絶えた後の状態と、「健康」な状態との断絶の不安こそケアされるべきであり、中心問題なのではないかと考えるのである。

「健康」な「寿命」が終わった状況に陥ってしまったときのQOLとは何なのか。あるいは「健康」とは何なのか。「健康」はいわゆる病のない者や健常者たちの独占物なのか。それぞれの当事者にとっての「QOL」、「健康」の意味こそがまず問われるべきなのではないか。老年学領域の成果に目を通しながらこのような問いが湧いてくる。

もともと、老年学領域における研究でも、より広範なQOLの指標を策定する努力は重ねられてきていることもたしかである。1995年に策定されたWHOにおけるQOL尺度(WHOQOL-100)において、<スピリチュアリティ・宗教・個人の信仰>についての質問項目が加えられて以降、この項目のQOLが心理的、主観的生の充足感に大きく関係し、QOL尺度に不可欠なものとして重要視されてきている。この項目は、上述したサクセフルな健康状態を失ったあとでもQOLが充足されうることが示されることに役立っている。このことは、QOL尺度に奥行きを与えつつ、宗教的ケア、スピリチュアルなケアを老年学領域で探求する経路を提供しているのである。

考察ではまず、まだラフな研究ノートの考察にとどまらざるを得ないが、前半において超高齢社会におけるケアをめぐる問題群と個人が帰属する宗教教団(および修養的理念を有した理念団体)との関係について概要を示したのち、後半においてQOL、健康概念について検討する